

「時間性の哲学」の脱構築に向けて

峰尾 公也（早稲田大学）

本稿は2019年12月22日に行なわれた拙著『ハイデガーと時間性の哲学——根源・派生・媒介』の合評会での、森一郎氏、渡名喜庸哲氏、齋藤元紀氏の各発表への応答を意図したものである。合評会当日はフロアからの質問も含め非常に多くの論点が提示され、しかもそのひとつひとつが熟考を要する本質的な問題にふれるものであったため、ここではそのすべてに応答することはできないということを、あらかじめお断りしておく。また、本誌に掲載される原稿と当日の発表原稿とはかならずしも同じではないことを考慮するに、各論点にたいするわたしの応答が噛み合っていない場合があるかもしれないということも、あらかじめお断りしておく。

1. 全体にかかわること

わたしが本書でとくに主張したかったことを三点にまとめるならば、次のようになるだろう。第一に、ハイデガーの「時間性の哲学」は、その内在的問題のひとつを「根源」と「派生」の区別にかかわる用語法ないし思考法のうちにもっているということ。第二に、その問題への批判的観点が、レヴィナス、リクール、デリダといったフランスにおけるハイデガー受容者たちのもとで重要な役割を演じているということ。第三に、とりわけリクールのもとに見出される「媒介」という語を再考することが、この問題の解決の糸口を提供しうるということ。

同書をひとつの「ハイデガー研究書」として読む場合——そう読まれることを期待するが——このなかで議論の的となるのは明らかに第一の点である。この点に関するわたしの立論は、『存在と時間』における「時間性からの時間内部性の派生」（第一部第二編第六章）と「時間性からの歴史性の演繹」（第一部第二編第五章）のそれぞれに或る限界を指摘するという形をとった。すなわち、前者の「派生」においては「根源的自然」が、後者の「演繹」においては「根源的歴史」が、それぞれ抵抗を示すということを明らかにすることで、それらを「隙間なく」完了させようとするハイデガーの狙いに一定の限界を指摘しようと試みた。

この多分に「脱構築的」な解釈方針が、ハイデガー研究の観点からの反論や苛立ちを呼び込むことは避けられないだろう。そこにはハイデガーの企図の不当な矮小化があるという非難、つまり著者はあらかじめ自分で設定した問題設定にとって都合の良い部分だけを切り取ってあたかもハイデガー哲学の全体であるかのように扱っているという非難は、この本にたいして当然寄

せられてしまるべきものである。森・齋藤両氏の指摘されるとおり、ハイデガーの全コーパスのなかには、それによればこの哲学者が出口のない迷路でさまよっているとされる本書の狭隘な問題設定の範囲内に收まり切らないような、慎重かつ豊かな記述を見つけ出すことが際限なく可能である。じっさい『全集』百巻以上を数える一次文献の膨大さ（しかもそれ以上に膨大な二次文献がこれに加わる）、多様な解釈を許容する難渋な文体、概念や主題の豊富さ、思索のたえざる転回、こういった要素がすべて合わさって、ハイデガーの哲学に難攻不落の要塞という外観を与えていた。この要塞の内部では、その主張のひとつひとつが、補完的であったり対立的であったりする別の主張をいくつも見つけ出せるため、ハイデガーが完全に反駁される日はおそらく永久に来ないだろう。けれどもそれは、この哲学が完全無欠だからというより、それがあらゆる批判をかわせる形で構築されているからのように見える。わたしはこの要塞の内部にとどまりつづけるよりも、外部への通路を残しておくために、その武装を部分的に解除することを望んだ。現代フランス哲学によってハイデガーはもう乗り越えられたとか、現代フランス哲学全体がハイデガーの誤読のうえに成り立っているとか、そういう一方的な見立てをせずに、双方を公平に媒介することがこの本の狙いであった。そしてこの狙いに関しては——その論証過程には疑問を差しはさむ余地が大いにあるにせよ——提題者の方々にも理解を示していただけたように思う。

2. 森氏への応答

森氏の提題はとくに「世界時間」と「等根源性」という二つの概念の扱いにかかわるものであった。これらはハイデガー哲学のうちで「媒介」というものを考えるうえでとくに重要な概念であるため、本書の問題設定からするとまさにアキレス腱といえるものである。これに関してわたしは主張したかったのは、ハイデガーがこれらの概念を「根源」と「派生」の区別の内部で取り扱っているため、それらの「媒介」機能が十分に発揮されていないということであった。ハイデガーが『存在と時間』で提示しているのは「時間性」から「世界時間」を介しての「通俗的時間概念」のシームレスな「派生」という手続き（根源→派生）であるのに対して、わたしは提示したかったのは「時間性」と「通俗的時間概念」という二つの（等根源的な）根源を架橋する「世界時間」という「媒介」という手続き（根源←媒介→根源）であった。さらに、わたしは「本来性」と「非本来性」との関係を「等根源性」の関係として思考しようとしたのも、これと同じ手続きに基づいている。森氏の提題内容は、大筋では、わたしがハイデガーに反して提示しようとしているこの手続きは、ハイデガー自身が提示しようとしている手続きとして十分に解釈できるというものであったように思われる。

こうした意見の不一致は、わたしと森氏とのあいだでのハイデガー読解の方向性の相違に起因する部分が少なからずあるかもしれない。わたしは、ちょっとした言葉選びや言い間違いのよう、著者の主張とは直接には関係がなさそうにみえる例外的な部分にこそ、著者自身の思想の

本質がよく現れていると考える傾向がある——この傾向のために、わたしはオーソドックスな文献解釈よりも脱構築的かもしくは精神分析的な文献解釈のほうに親しみを覚える——わけだが、これは森氏の読解の方向性とはおそらく異なっているのだろう。その結果、わたしが「時間性の哲学」の「解体」ないし「脱構築」として行なったつもりのことが、森氏の目には、単なるその「破壊」と映ったのではないかという懸念がある。わたしは「時間性の哲学」に死亡診断書を突きつけようとしたわけではなく、その内部に残存しているようにみえる、伝統に帰属的な部分、形而上学的な部分を指摘しようとしたのであった。この機会にはっきりと表明しておきたいが、わたしは自分自身を、一般的に「失敗」しているといわれる——のちにハイデガー自身にもそういわれる——「時間性の哲学」の威力を相当高く見積もる研究者だと、また「世界時間」や「等根源性」といった一般的にはそれほど重要視されない現象をきわめて重要視する研究者だと自任している。だからこそ、その威力や重要性を曇らせているようにみえる諸要因を指摘するという本書の課題が生じたのであって、本書はそれらを告発することを目的としたわけではなかった。本書は、もしかするとハイデガー哲学を批判することを目的としているように見えるかもしれないが、じっさいはむしろ逆で、そこに潜んでいる問題とそれへの解決を提示することで現代フランス哲学との対話的関係においてそれを復権させることを意図している。たしかに、わたしが指摘しようとしている「根源」と「派生」の問題は、ハイデガー哲学の射程を測るうえでは杓子定規にすぎるであろう。わたしはこの問題をとくにデリダから引き出しており、その解決策として持ち出す「媒介」はリクールから引き出している。この点に関して、ハイデガーを彼自身の問題設定においてより豊かに読むべきだという森氏の指摘に反論するところはまったくない。ともあれ、少なくともわたし個人の実感としては、森氏がハイデガー哲学そのものにみようとしている絵図は、わたしがそれを部分的に脱構築することによってみようとしている絵図と、大きくは異なるんだろうという印象がある。

3. 渡名喜氏への応答

わたしはハイデガーとレヴィナスの関係を考えるうえで、そこに断絶や対立だけをみるのは非常に危険だと考えていた。というのも、レヴィナスの思想の基礎となる部分が入念なハイデガー読解を通じて形成されていることは明らかであるため、レヴィナスをハイデガーから切り離して読むことは、まさにその基礎の部分を読まないことに等しいと思われたからである。そういうわけで、わたしは本書でとくに両者の取り組んでいる超越の時間的解釈という課題の共通性に着目するという読解方針をとったのだが、第一線のレヴィナス研究者である渡名喜氏にこの読解方針にご賛同いただけたことは、ハイデガー研究者であるわたしにとっては大変勇気づけられることであった。

さて、渡名喜氏の提題は「基礎的存在論」の「基礎的」とはどういう意味でいわれているのかということに焦点を当てている。これは、わたしが本書のなかで殊更には取り上げなかつた論点

であるが、そこでの「根源」と「派生」という問題設定からして、検討すべき重要な論点であることは間違いない。まずは、この論点に対するわたしの応答を記しておく。

周知のとおり、『存在と時間』では「基礎的存在論」を「実存論的分析論」として仕上げることが暫定課題とされる。この場合、「実存論的分析論」は「存在一般の意味への問い合わせ」に向けての準備ないし基礎をなすという意味で「基礎的存在論」と呼ばれていると解するのがおそらく一般的な理解であろう。問題は、この「基礎的存在論」には「諸学の基礎づけ」という課題も——明確にはないが——含まれているようにみえるという点である。これはたしかに、ハイデガーよりもカントやフッサールのもとで目立っている課題だが、彼らからの影響色濃い1920年代のハイデガーの「基礎存在論」構想がこの種の課題をまったく含んでいなかつたとは考えにくい。それゆえ、少なくともこの時期のハイデガーに関して、そこから「存在論は基礎的＝根源的である」という理解を引き出すことは誤りではないだろう。

しかし、1930年代以降になると話は別である。この時期にはもうハイデガーは「存在論」を「基礎的」とも「根源的」とも言わないし、おそらくそのように考えてもいい。『形而上学入門』において、ハイデガーは「存在論」という標題の使用を断念すると表明し、それ以後、彼自身の企図を指すものとしてはこの「存在論」という言葉は使用されなくなる。したがって、この時期のハイデガーに関して、そこから「存在論は基礎的＝根源的である」という理解を引き出すことはおそらく誤りであろう。

そのうえで問われるべきは、レヴィナスが「存在論は根源的か」で問題としているのが、どの時期のハイデガーなのかということである。渡名喜氏の指摘するとおり、この論文では『真理の本質』（1930年の講演を元に1943年に論文化）でのハイデガーが潜在的に問題になっているとすれば、そこでのハイデガーはもはや「存在論は基礎的＝根源的である」とは想えていなかつた可能性が高い。その場合にしかし、同時に浮上してくるのは、レヴィナスがこの時期のハイデガーの真理論や「転回」ということから何を受け取ったのかという疑問である。レヴィナスは、推して知るべき理由から、ハイデガーの後期のテクストにさほど関心を払わなかつたが、とはいえるをまったく知らなかつたわけではなかつた。戦後のレヴィナスがハイデガーについて語るとき『真理の本質』も念頭に置かれていたということは、『全体性と無限』を読解するうえでも見過ごせないだろう。これはわたし自身、今後の研究において肝に銘じておきたい点である。

それから、本書はレヴィナスの時間論をハイデガーのそれとの比較において考察したため、そうした比較を設けることが難しい主題をとくに断りもせずに避けていた。その結果、たとえば『時間と他者』における「エロス」や「女性的なもの」といった主題の考察が抜け落ちることとなつた。これにより、わたしは時間性の時熟にさいして外から働きかけるところの他性を、「女性的なもの」というエロティックな他性ではなく、「顔」という倫理的な他性として読んでしまつたのだが、渡名喜氏の指摘するとおり、これはわたしの誤解である。今後本書を読む方は、ぜひ同じ轍を踏まないように気をつけてほしい。

4. 斎藤氏への応答

斎藤氏の提題は「根源的自然」「根源的歴史」「内部と外部」という三点にかかわっている。それから斎藤氏も、森氏と同様、本書の読解方針の戦略性という点に注意を促しており、これに関しては先の森氏への応答のなかで或る程度の応答は済ませてきた。

まずは「根源的自然」について応答する。斎藤氏は、本書におけるこの語の中身や位置づけ、あるいはそこから引き出される結論などに存する不透明性を鋭く指摘している。これは、わたし自身も部分的に自覚していた問題点であったため、あらためてその問題性を突きつけられる恰好となった。わたしはこの語を、基本的には、ハイデガーが『根拠の本質』で「根源的時間」と呼んでいるものを意図して用いており、そのかぎりで——斎藤氏も見抜いているとおり——「全体としての存在者」と重なるものとして使用している。ところが、わたしがこの語に負わせている戦略的機能はそれに尽きてはいない。わたしはそこに、たとえば、ミシェル・アールの指摘しようとする（それゆえハイデガーが問題としている）種類の根源的自然のニュアンスや、アリストテレス時間論における運動のニュアンスなどもそれとなく含ませていた。その結果——これは渡名喜氏の指摘された点だが——レヴィナスが「始原的なもの」と呼ぶものと重なるような側面までもそこに含み込まれるまでに至っている。要するにわたしは、そこに分節化すべき境界線を数多く残したまま「根源的自然」という唯一の名称をもってそれらを取り囲んでいたのであった。こうした事態が本書の立論にとって都合よく利用されていることは明白である。この点に関する判断は個々の読者に任せるが、筆者としては、そこに積極的なものを見るることはかなり難しいと考えている。

つづく「根源的歴史」についても、これと似たことが起こっている。わたしがこの語によって指示しているものは、根源的時間の時熟に先立つてすでにある、歴史的地盤、言語構造、あるいは伝統ないし伝承のようなものである。別の言い方をするなら、ハイデガーの「時間性の哲学」がじつは前提としていながら、それを時間性によって基礎づけようとしているものといつてもよい。この語を使用することでわたしは、『存在と時間』においてほとんど徹頭徹尾、時間性に従属させられているようにみえる歴史性に、それに固有の地位を還付することを試みた。そしてまた、そのような地位に置かれた歴史性との関連において言語の問題に取り組むことが「時間性の哲学」の内在的問題のひとつを解決しうるという展望を示すことを試みた。これらは、わたしの見るところ、リクールやデリダがそれぞれの仕方で試みたことであり、本書の狙いのひとつは彼らのその試みをハイデガー解釈の文脈において明確化させることにあった。

以上のわたしの試みは、じっさいであれば、斎藤氏の指摘されているように、『存在と時間』第二部の「現象学的解体」の未遂計画がこの「時間性の哲学」のうちで果たしうる重要な役割を説明するものとなりえたであろう。そして、時間性からの時間内部性の派生を歴史性を援用して行なうべきだというわたしの主張が、そのことの裏付けとなりえたであろう。しかし、本書の執筆段階では、わたしの視線は『存在と時間』第一部第二編の最後の二つの章の内部に釘付けにされていたため、そこに潜む問題点を指摘することより先まで目が届かなかった。これについて、

本書の読者はわたしと同じ視野狭窄にかかる必要は当然ない。

最後に「内部と外部」という点に応答する。この点に関するわたしの主張は、混乱しているか、よくて不透明だといわれよう。というのは、一方で、根源的自然とか根源的歴史といったものは根源的時間の外部に位置づけられており、そこに問題が指摘されていながら、他方で、わたしがその問題に対して提示しようとする解決策は、この根源的時間の支配圏にある形而上学の内部において「媒介」という観念を再考することに求められているからである。まず、齋藤氏も察しているとおり、わたしは「形而上学の外部」になんらかの救いを求めようとはしていない。つまり、まったくの新奇な語や概念を使って、この問題を解決するというのは無理筋だと考えている。むしろわたしは、古い語を使って、その解決に近づこうと試みたのであり、そのために目をつけたのが「媒介」という語であった。それによりわたしは、形而上学の可能性のうちに、一なる根源から他のすべてを派生させるのではなく、多なる根源間を媒介する方法を、あるいは——こういってよいかわからないが——エコノミーを見出したいと考えた。そのためにわたしは、自然とか歴史とかといったものを、根源的時間の支配から部分的に引き剥がし、それらに根源性を還付して、それらのあいだの媒介ということを積極的に主張しようとしたのであった。

さて、以上が提題者の方々へのわたしからの暫定的な応答である。いずれも、かなり歯切れが悪く、内容的にも不十分だという自覚はあるが、現時点ではこれで精一杯というのが正直なところである。じつに、それがいかに奇妙に聞こえようとも、自分で書いた本を読むのに苦労するということが起こりうる。自分で生み出したにもかかわらず、それと折り合いをつけることに苦慮せざるをえないようなものがありうるだろう。以下は雑感だが、ハイデガー自身にとって「時間性」はまさにそのようなものであったように思われる。この概念にはどこか神秘めいたものがあり、わたしは本書でそれを脱神秘化しようと試みたのだが、とはいえた最初にわたしをそこに引きつけたのはまさにその神秘性であった。本書は、わたしがそこに誘い込まれて歩き回った「時間性の哲学」という迷宮についての一記録である。今後この迷宮に足を踏み入れる者は、少なくともわたしが迷った地点を知ることはできるわけだから、わたしよりはるかに多くの成果をそこから持ち帰ることができるにちがいない。望むらくは、わたしが最後の侵入者とならないこと、ただそれだけである。

Kiminari MINEO
Zur Dekonstruktion einer Philosophie der Zeitlichkeit